

町内遺跡XV

史跡 比企城館跡群 小倉城跡 I

—令和3(2021)年度郭1(本郭)上段地点調査報告—

—令和5(2023)年度航空レーザー測量速報—



令和3年(2021)度調査区全景オルソ写真

2025

ときがわ町教育委員会

序

本町は、平成18年2月に旧玉川村と旧都幾川村が合併して誕生しました。

埼玉県のほぼ中央に位置し、豊かな山々と、西から東にかけて「都幾川」が流れており、自然豊かな風景が広がっています。令和8年2月には町制施行20周年を迎えます。

町内には慈光寺が所有する国宝の法華経一品経や今回調査報告をする国指定史跡小倉城跡をはじめ、数多くの文化財があります。埋蔵文化財としては100箇所以上の遺跡が分布しています。

この度、令和3年度に実施した国指定史跡小倉城跡における学術調査の報告書を刊行することとなりました。小倉城跡は平成20年に国指定史跡となりましたが、未だ不明な部分が多く残されております。本書では、郭1北側上段の平場における層序の確認と、平場としての空間構造の基礎資料を得る目的として実施した調査の成果を示した内容となります。

本書が、文化財保護や生涯学習資料として、また考古学、歴史学、郷土史研究等の基礎資料として広く御活用いただければ幸いに存じます。

結びに、調査から本書の刊行に至るまで、地元関係各位、小倉城跡調査指導委員各位、埼玉県教育局文化財・博物館課に多大なる御指導、御協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

令和7年3月
ときがわ町教育委員会

教育長 新井 克仁

例　　言

1. 本書は、埼玉県比企郡ときがわ町大字田黒字城山ほかに所在する史跡比企城館跡群小倉城跡に関する報告書で、内容構成は令和3年度に実施した郭1（本郭）上段地点の発掘調査報告、令和5年度に実施した航空レーザー測量調査の速報について掲載している。
2. 上記発掘調査と出土遺物の整理作業は文化庁国庫補助金・県費補助金、町支出金を持って行い、ときがわ町教育委員会において実施した。
3. 発掘調査は、杉山拓馬が担当し石川安司が補助した。現地写真は杉山が撮影し遺物写真の撮影は石川が行った。本書の編集は石川が行った。報告書掲載図の編集とレイアウトは株式会社中野技術に委託した。
4. 航空レーザー測量調査は、国庫補助事業の採択を受け国庫補助金、県費補助金、町支出金をもって令和5年度に実施した。ここでは、事業の性格と成果の重要性から測量成果の一部を速報するもので、現地踏査などの検証を経た本報告は改めて行うとする。事業の企画は杉山において行い、伊奈町教育委員会の協力を得た。測量受託者は株式会社中野技術、航空レーザー測量は朝日航洋株式会社が行い、図面の校正は石川が行った。
5. 発掘調査から本書作成、出土遺物の所見について下記の方々、諸機関よりご指導ご教示を賜った。記してお礼申し上げる。（順不同、敬称略）
浅野晴樹、田中信、落合義明、宮田毅、梅沢太久夫、橋口定志、清水理史、村山卓、梶原勝、小倉城跡発掘調査指導委員会、ときがわ町シルバー人材センター、伊奈町教育委員会、株式会社中野技術、朝日航洋株式会社
6. 発掘調査・整理作業員、報告書編集支援員
山崎尚子、須永高二、菅原康博、島田健一、石川安司、小林陽子、大原美紀、坂井美樹子

目　　次

令和3(2021)年度郭1(本郭)上段地点調査報告

I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査と報告書刊行事業の組織	1
II 地理的・歴史的環境	2
1 地理的環境	2

2 歴史的環境	4
3 遺跡の概観	7
4 調査の概要	9
III 遺構と遺物	12
1 遺構	12
a 堀立柱建物跡	12
b 柱穴	15
c 集石	16
d 溝跡	17
e 性格不詳遺構	17
f 石積み遺構	17
2 遺物	18
IV 小結	19

挿図表目次

第1図 小倉城跡周辺の地形と主要戦国期城館・寺社・遺跡	2
第2図 小倉城跡と周辺の地形構成詳細図	3
第3図 小倉城跡周辺の地形と眺望	3
第4図 周辺の遺跡 1	5
第5図 周辺の遺跡 2	6
第6図 小倉城跡遺構配置図	8
第7図 郭1(本郭)推定鳥瞰図	9
第8図 小倉城跡陰陽図(提供 朝日航洋 株式会社)	9
第9図 令和3年度小倉城本郭上段地点トレンチ設置位置図	11
第10図 小倉城跡本郭上段平場令和3年度調査区全体図	12
第11図 1号堀立柱建物跡、溝跡平面図	13
第12図 1号堀立柱建物跡P8-P4断面図	13
第13図 1号堀立柱建物跡P9-P5、P10断面図	13
第14図 溝跡断面図	13
第15図 2号堀立柱建物跡平面、断面図	14
第16図 1・2号堀立柱建物跡、柱穴土層断面図	14
第17図 4トレンチ柱穴(P11・12平面、断面図)、2号集石	15
第18図 1号集石、石積み遺構(平成17年度調査済遺構)	17
第19図 本郭上段地点出土遺物	18
第20図 参考資料 平成17年度調査上段地点第2虎口、通路部出土遺物	19
表1 柱穴、性格不詳遺構観察表	16

写真図版目次

- 写真図版 1 本郭上段調査前現況 西から東／本郭上段調査前現況 東から西／本郭上段調査前現況 北から南／本郭上段調査前現況 南から北／トレンチ設置地点／トレンチ設置状況 南から北西
- 写真図版 2 1次精査 1トレンチ／1次精査 2トレンチ／1次精査 3トレンチ／1次精査 4トレンチ／1次精査 1トレンチ近景／1次精査 3トレンチ近景
- 写真図版 3 1トレンチ かわらけ出土状況／1トレンチ 丸火鉢出土状況／1トレンチ 在地系擂鉢ほか出土状況／4トレンチ 天目茶碗出土状況／1トレンチ サブトレ出土遺物／1トレンチ 磨石(盤双六駒)出土状況
- 写真図版 4 1号集石 1次精査確認(ドローン写真)／1号集石 南西より／1号集石(オルソ写真)／2号集石(オルソ写真)／2号集石(上段郭西端低土壘基礎地業)／2号集石サブトレンチ内エレベーション
- 写真図版 5 1・2号掘立柱建物跡、1・2号溝／1号掘立柱建物跡、1・2号溝／2号掘立柱建物跡
- 写真図版 6 1P、2P(2号掘立柱建物跡)／1P、2Pセクション／3P(柱痕確認)／4P(柱痕あり)／5P(柱痕あり)／6P(石墨片岩面掘削)
- 写真図版 7 7P(石墨片岩面掘削)／8P／9P(断面柱痕あり)／10P／11P、12P／13P(中央トレンチ壁際 確認時)
- 写真図版 8 1P、2P、3P、SX2～8／4P、5P、6P、7P、10P、SX1／6P、7P、8P、9P／4P、5P、6P、10P、SX1／サブトレ内石墨片岩岩盤／SX2～8(黒○印—確認のみ未掘)
- 写真図版 9 SX9(黒印—確認のみ未掘)／1・2号溝／上段郭西端岩盤掘削とその上の造成土(4TsbT 南西より)／上段郭西端岩盤掘削(中央)造成土(右)(4TsbT 西北より)／上段郭西端造成土と2号集石(土壘基礎地業と低土壘土層断面)
- 写真図版 10 上段郭東石墨片岩岩盤、造成土、1号集石／上段郭東端岩盤掘削と造成土土層断面／上段郭東岩盤掘削状況と造成土、1号集石／2P岩盤掘削痕／9P掘方岩盤掘削工具痕(扁平な蒲鉾状)／上段郭東端石積み遺構
- 写真図版 11 調査区全景(オルソ写真)
- 写真図版 12 作業風景1／作業風景2／作業風景3／養生シート被覆／埋戻し1／埋戻し2
- 写真図版 13 令和3年度 小倉城跡郭1(本郭)上段地点出土遺物 表／令和3年度 小倉城跡郭1(本郭)上段地点出土遺物 裏

令和5(2023)年度 史跡比企城館跡群小倉城跡航空レーザー測量速報

史跡 小倉城跡 陰陽図(協力 朝日航洋 株式会社).....	i
I 調査の経緯	i
II 調査と主な成果の概要	ii

報告書抄録	ii
-------------	----

令和3(2021)年度郭1(本郭)上段地点調査

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経緯

小倉城跡は、平成20年3月に史跡菅谷館跡に松山城跡、杉山城跡とともに追加指定され併せて比企城館跡群菅谷館跡・松山城跡・杉山城跡・小倉城跡へ名称変更が行われた。その後の主な取り組みは、平成22年3月に小倉城跡保存管理計画書策定、平成23年度史跡隣接地の山麓部に臨時駐車場整備、史跡内崖地崩落箇所への安全柵設、平成24年度郭1(本郭)ベイマツ伐採チップ化、小倉城跡調査指導委員会発足、小倉城跡周辺整備検討委員会発足、平成25年度小倉城跡周辺整備方針策定。国庫補助事業の採択を受け平成27～29年度の三か年事業で、ときがわ町分の山頂から中腹にかけて要害部の公有地化事業を実施し39,620m²を用地取得。平成30年度に2郭と郭4を隔てる大堀切の立木伐採チップ化、令和元年度に山麓部の大福寺境内に同寺と檀家諸氏に協力をいただきバイオトイレ設置、郭2立木伐採を行い小川町下里の青山城跡方面の見晴らしを確保。以上羅列した事業は基本的に平成22年度に策定した当該史跡の保存管理計画に謳われた事業の実施にあたる。この後に続く事業としては、整備関係の諸計画となる段階であるが平成30年度に行われた文化財保護法の改正に伴い、史跡整備へ移行する計画体系が改編された為、新たに保存活用計画又は整備基本構想・計画の策定を行う必要に迫られた。この問題に伴い令和2年10月に町文化財担当が県文化財担当の同行のもと文化庁に赴き担当調査官より指導を頂いた。結論的には、諸計画に移行する前段階として指定前の調査が郭1(本郭)に偏っていたため史跡全体の状況が掴めておらず、主要な郭の平場、土壘、虎口の構造、郭の層序、本来の登城路の大凡の基礎情報を得る発掘調査を行うことを骨子とする指導を受けた。これに基づき、町では内容確認の発掘調査年次計画の叩き台を策定し、設置されていた町発掘調査指導委員会と県文化資源課(当時)の指導により計画をまとめた。その内容は、初年度調査を現地表下に浅く岩盤面が存在し比較的遺構確認も容易と推定される郭1(本郭)上段地点とし、以下2年度目に北方郭群の舟形虎口地点、3年度目以降は郭2、郭3と順次進捗状況に応じて行い最終年度に本報告を行うこととした。令和3年7月8日付けで県教委経由で文化庁長官あてにて発掘調査地点の現状変更申請を進達、令和3年9月9日付け3文府第1085号で文化庁より許可書が発出され、令和3年10月1日付けとき教生第150号にて県教育長あて本報告地点の埋蔵文化財発掘調査通知を進達し、11月5日より現地で準備を開始、同11月11日より調査を開始した。

2 発掘調査と報告書刊行事業の組織

発掘調査 令和3年11月～令和4年3月

整理作業 令和4年4月～令和7年3月

事務局

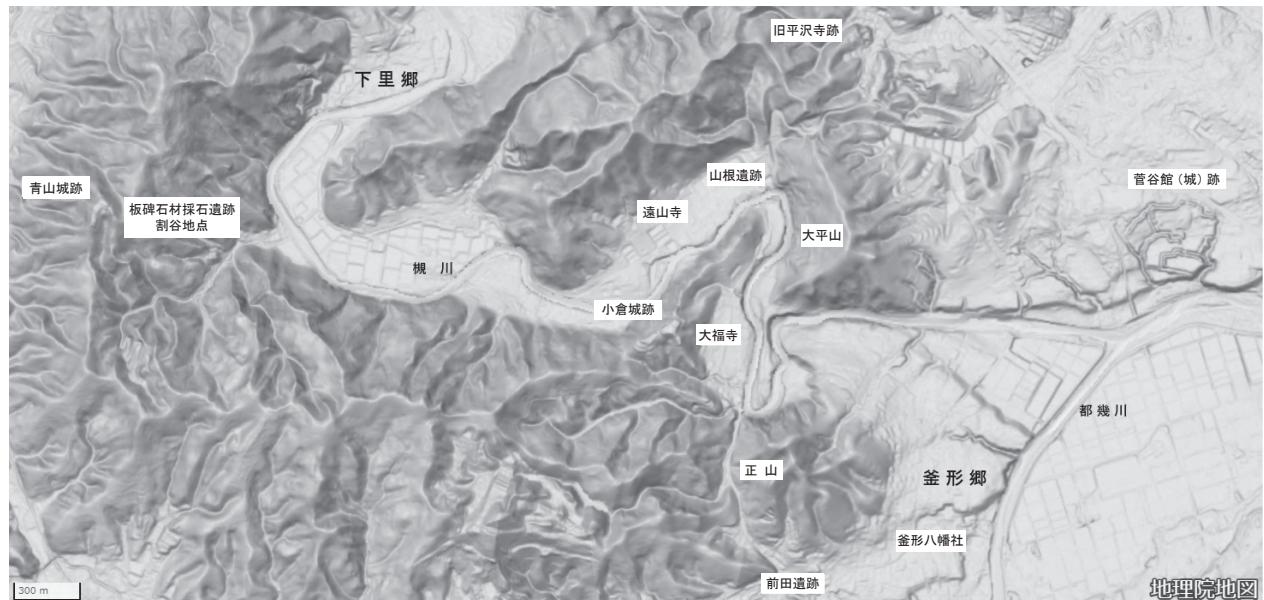
教育長	久米 正美(令和3～5年度)
教育長	新井 克仁(令和6年度～)
生涯学習課長	大野 健司(令和3・4年度)
生涯学習課長	正木 達也(令和5年度～)

生涯学習課主幹	田中 和浩
文化財担当	杉山 拓馬（～令和5年9月）、田中希来（令和5年9月～令和6年3月）
文化財担当	高橋 周良（令和6年度～）、石川安司（令和5年10月～）
発掘調査担当者	杉山 拓馬
整理作業・報告書刊行担当	杉山 拓馬（～令和5年9月） 石川 安司（令和5年10月～刊行日）

II 地理的歷史的環境

1 地理的環境

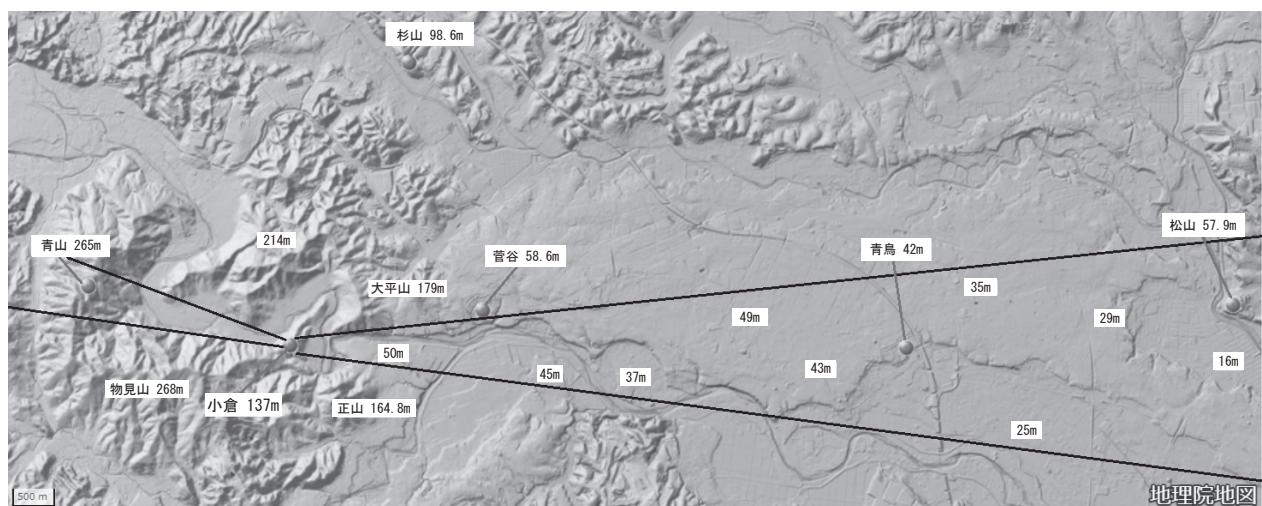
小倉城は比企郡ときがわ町大字田黒字城山を中心に嵐山町遠山、小川町下里の境界に位置し三町にまたがって所在する。城跡は外秩父の山地帯と関東平野の境界にあり、大きく蛇行を繰り返す槐川と大平山（嵐山町）や正山（ときがわ町、嵐山町）の山地に囲まれ「東北は都幾川・槐川の二流に臨み西南山に添いて頗る要害の地」、「要害は連山ノ鼻、槐川ヲ北東南ニ帶 岸嶮ク高シ」と江戸後期の地誌に載せ正に天險の地に拠っている。その構造は、要害部である城山と山麓の根小屋となる可能性がある大福寺の平場を中心とする梯郭式の山城で、大福寺前面の構堀（第2図a・b）、城山の南北より流れ出る自然の谷（第2図A・B）、小倉集落を載せる河成（河岸）段丘と槐川、更にその外側に広がる大平山・正山の山稜（第2図イロハニホヘ）など地形を巧みに取り込むことにより幾重にも重なる同心円的に画された空間の中にあり、自然地形を利用した総構え的な景観を有する（第1・2図）。城からは、槐川の上流下里方面と下流（都幾川）の菅谷、鎌形、大蔵、唐子、松山方面の視界が良好に確保されておりこの城にとって繋ぎの位置にある青山城をはじめ菅谷城や遙かに松山城が目視でき山上から当時必要であった視界は充分に確保されている（第3図）。従来、周りを高山に囲まれ陰の城または築城の定石に反する立地などと称されたが、この城にとって青山城と菅谷、大蔵、唐子を含めた都幾川・槐川流域の東



第1図 小倉城跡周辺の地形と主要戦国期城館・寺社・遺跡（国土地理院提供 電子国土web地図加筆転載）



第2図 小倉城跡と周辺の地形構成詳細図（国土地理院提供 電子国土web 地図加筆転載）



第3図 小倉城跡周辺の地形と眺望（国土地理院提供 電子国土web 地図加筆転載）

西軸確保がまず欠かすことのできない絶対条件なのだろう。その為にこの地にわざわざ拠っている極めて合理的な占地で、天文～永禄期をピークとするこの地域の緊張情勢に即したものと理解したい。

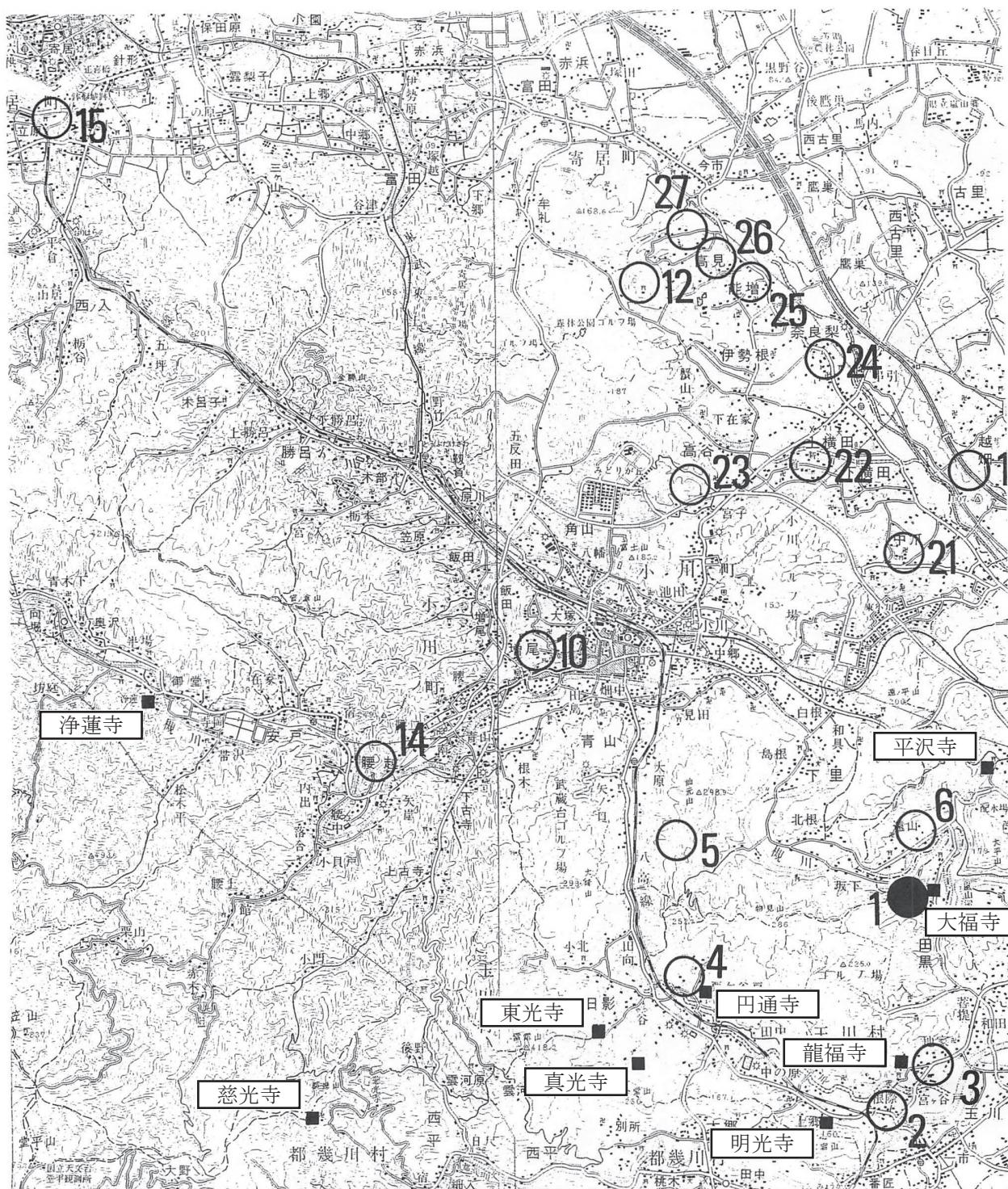
一方交通に視点を移すと、槐川・都幾川水系の重要性は鎌倉時代以来、武蔵型板碑の石材搬出にも機能していた可能性があり、戦国期に至っても比企地方と南関東の物流を語る上で重要な役割を担っていたと推測する。従来小倉城は鎌倉街道など陸路上からはやや奥まった地点にあり同街道上の菅谷城—杉山城—高見（四津山）城に対し、設置理由がいまひとつ不鮮明であった。鎌倉街道上道と山の根筋（現在の県道飯能寄居線またはJR八高線沿線ルート）の中間地域にあり双方にアクセス出来る点は戦国期の中武蔵地域主要道の変移を指摘する見解があり重要である（齋藤2005）。この城は、槐川、都幾川ルートによる河川交通の掌握と合わせて鎌倉街道と山の根筋の監視（封鎖）を担ったもので、この規模としては長期にわたって使用され定住性を伺わせる重要な場を占めている点を指摘しておきたい。

（村内遺跡I～III「地理的環境」に加筆）

2 歴史的環境

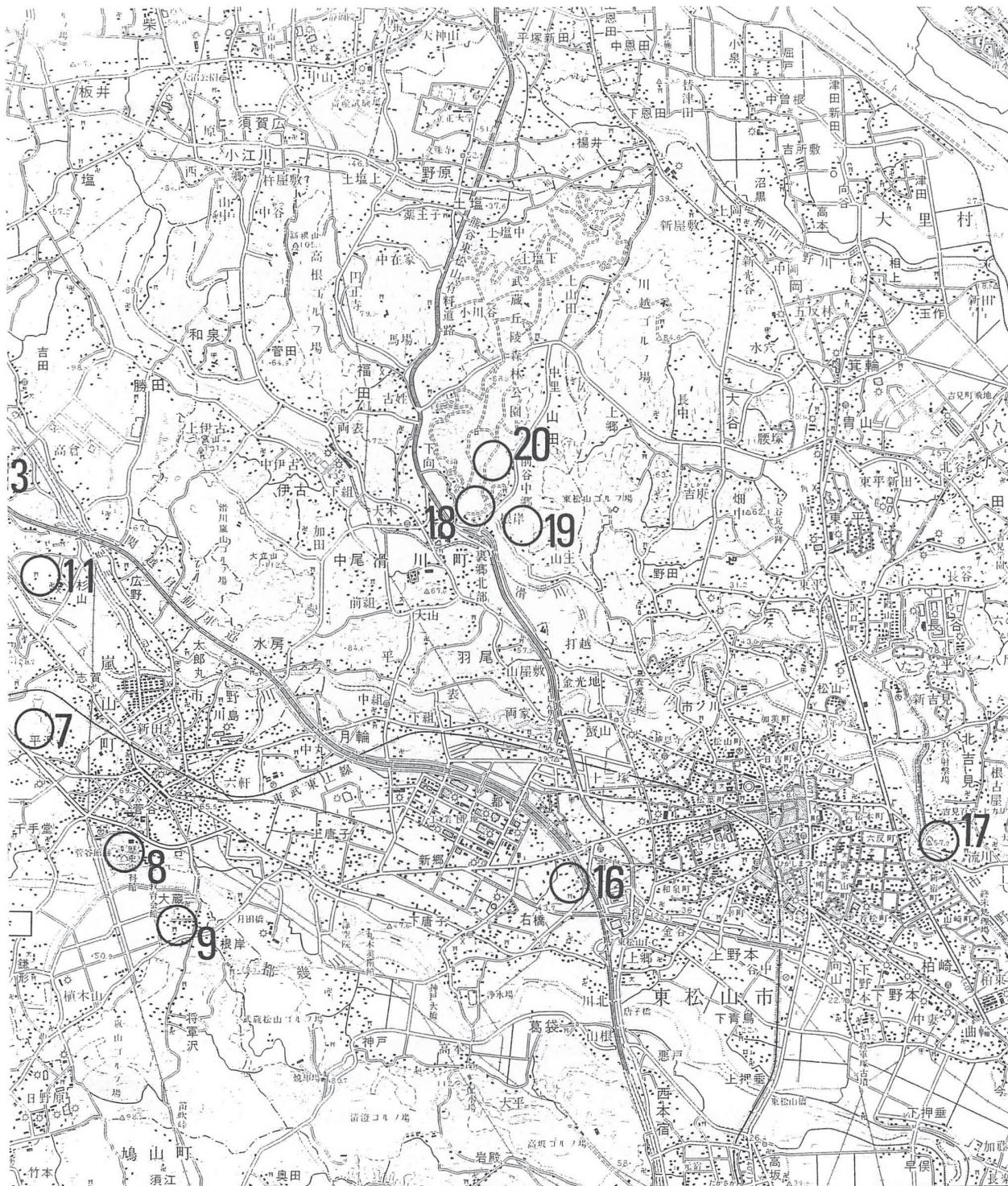
同時代の文献資料は現在も確認されていない。ただし、発掘調査により山麓部では15世紀末～16世紀前半の遺物（古瀬戸後期IV新段階など）、山頂要害部では16世紀前半の遺物（瀬戸美濃大窯1期）が確認されたため、長享4年（1488）小倉城から一山隔てた平沢寺に山内上杉方の陣所がおかれた須賀谷原の合戦、その後山内上杉氏により重視された「須賀谷」の地に関する記録には注意する必要がある。記録的には江戸時代の地誌類に登場し城主は新編武蔵風土記稿で遠山氏、武蔵誌で遠山氏または上田氏とする。城主とされる遠山氏を開基とする遠山寺の記録では、開山漱恕全芳が深谷上杉氏と関わりをもち永正十五年（1518）示寂していることから山内上杉氏や深谷上杉氏からのアプローチによる15世紀後半以降の地域史を再検討する必要もある。また、『遠山寺過去帳』記載法号「無外宗閑（政景）」「桃雲宗見（直景又は光景とも）」、の没年記事と『浅草寺誌』『改選諸家系譜』記載記事が一致する点を評価する指摘もなされている（利根川1991）。また、近年ときがわ町内の旧玉川エリアで戦国期の鰐口金石文銘（ときがわ町郷土史懇話会）と仏像胎内銘（ときがわ町郷土史懇話会2019、2020）に新資料が確認され注目される。特に、小倉城の山麓に所在する大福寺地蔵菩薩坐像から確認された胎内墨書銘には、「天正〔　〕年」の年季と「本願賢海權少僧都」「永海阿闍梨」「大旦那毛利遠江守内〔　〕」をはじめとするたくさんの僧俗銘が確認された。天正の年号については、平成15～17年度調査出土遺物の瀬戸美濃産大窯3期擂鉢、舟載磁器染付碗E群などとの時期が符合しあり直截的な解とはなるが興味深い点いとうよう。ただし、一緒に確認された江戸後期修理札（延享元年1744年）には「大福寺」「田黒村」の記載がありこの時期にこの小像が田黒大福寺に在ったことが解るが天正期の銘にはこの像の所在を示す記載が今のところ確認できず重要な資料ながら現段階では慎重に検討する必要もあるかもしれない。考古遺物、有形文化財とも関連する資料の研究進展が俟たれる。

周辺の遺跡（第1・3・4・5図）には、槐川を隔てて西500mにあるNo.6山根遺跡（13～16世紀）がある。発掘調査が実施されておりピット群、石敷き遺構、塚、銭埋納遺構などが確認され、深身形とホウロク形の内耳土器、古瀬戸後IV新～大窯I期段階と大窯III、IV期段階の瀬戸美濃製品が出土しており、年代の消長を示す定点資料が存在する。槐川下流2.3kmにはNo.8菅谷城跡があり県立歴史資料館建設（建設当時）や城跡内整備に伴う調査により、やはり古瀬戸後IV新～大窯I期段階の瀬戸美濃製品、15世紀代の白磁皿が出土している。都幾川流域で南へ2.5kmほどにNo.2玉川陣屋跡・根際遺跡（12世紀



第4図 周辺の遺跡 1

末～17世紀前半)がある。玉川陣屋跡では、B群の染付碗、C群の白磁、深身形とホウロク形の内耳土器が出土している。北東へ1.5kmに須賀谷原合戦のおり陣所のおかれた平沢寺が所在する。同寺エリア内と考えられるNo.7遠藤遺跡でピット群、井戸群、土坑、溝跡が検出されている。遺物は中世前期から断続的に出土しており古瀬戸後IV新～大窯I期段階の瀬戸美濃製品も出土している。その他、村内には山の根筋に属する中世円通寺にかかるNo.4栗ヶ谷戸遺跡群で14～15世紀の大量の在地土器が出土



第5図 周辺の遺跡 2

し、No.3 玉川堀ノ内遺跡群でも15世紀代の遺物が出土している。鎌倉街道上道沿いの状況では小川町内のNo.21日向、22中井、24台の前、25六所、26町場、27日丸等の諸遺跡で井戸跡、建物跡、土坑等が検出され、何れも15～16世紀前半頃までをピークとし日向、中井遺跡へと収束していったようだ。

【参考文献】

- ときがわ町郷土史懇話会2020『有志芳 別冊 龍藏寺本尊仏像調査報告書』
ときがわ町郷土史懇話会2019『大福寺仏像調査報告書』有志芳第12号 一小倉地区特集別冊一
ときがわ町郷土史懇話会2017『有志芳 一眞光寺特集一』第11号
杉山拓馬2019、2020『大福寺境内遺跡(第3次調査・第4次調査)』ときがわ町教育委員会
利根川宇平1991「戦国期」『玉川村史』玉川村
高橋好信・吉田義和2014『下里・青山板碑石材採掘遺跡群 割谷採掘遺跡』小川町教育委員会
石川安司2005a「石造りの山城 小倉城跡」『戦国の城』高志書院
2005b『村内遺跡I埼玉県指定史跡小倉城跡第1次発掘調査報告書』玉川村教育委員会
2005c『村内遺跡II埼玉県指定史跡小倉城跡第2次発掘調査報告書』玉川村教育委員会
2007『村内遺跡III埼玉県指定史跡小倉城跡第3次発掘調査報告書』ときがわ町教育委員会
2012『大福寺境内遺跡』ときがわ町教育委員会
2013a「武蔵小倉城跡について—在地性と流通・交通の視点を加えて」『中世社会への視角』高志書院
2013b『大福寺東遺跡』ときがわ町教育委員会
斎藤慎一2005「中世東国の街道とその変遷」『戦国の城』高志書院

3 遺跡の概観

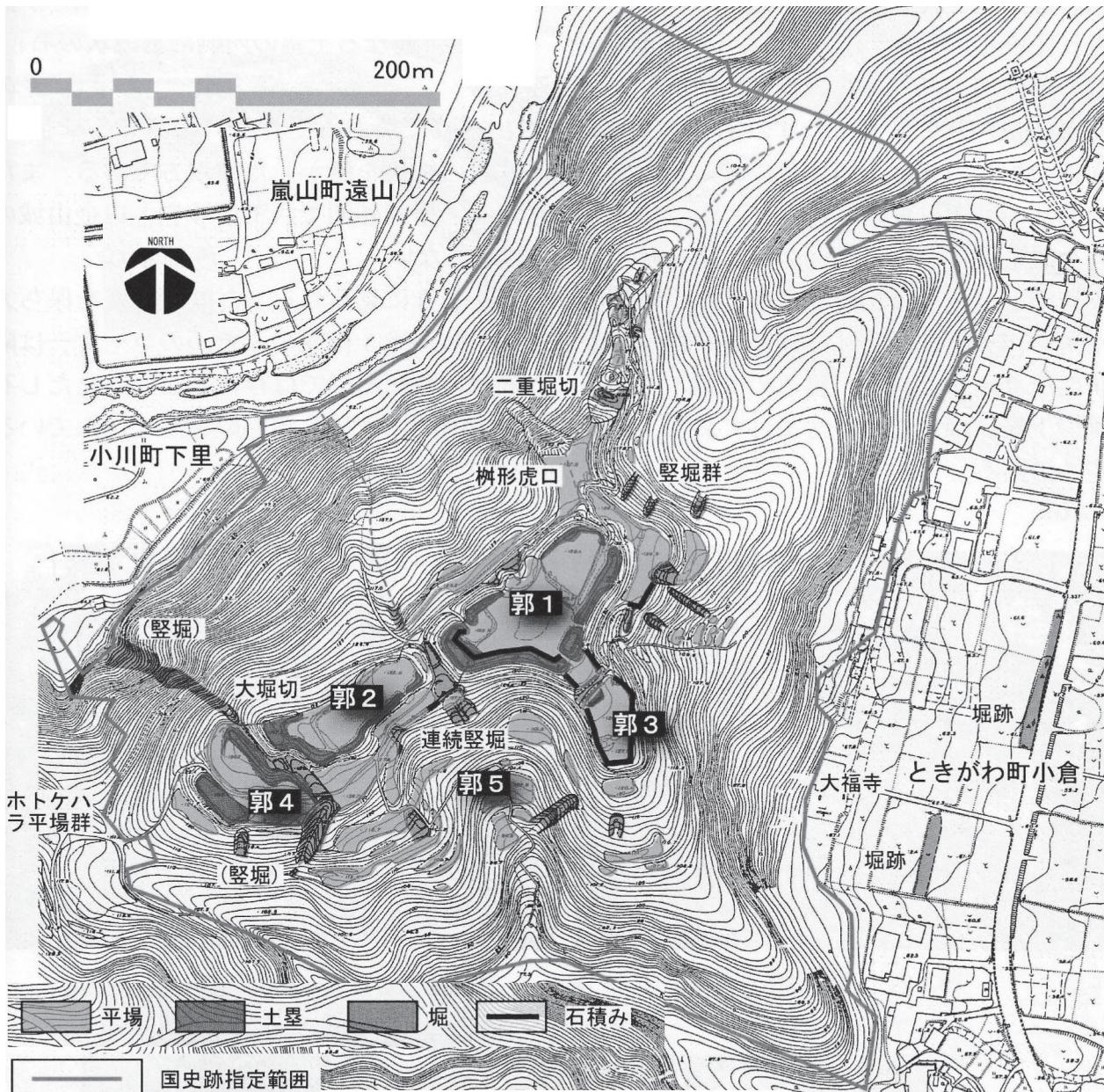
a 小倉城跡の概観(第6図)

小倉城跡は16世紀前葉から後葉にかけて存在した戦国後期の山城である。構造は、中腹から山頂にかけての要害部と山麓に小規模な城下集落が所在した根小屋式山城と推定される。縄張りは、山頂の二つのピークに本郭となる郭1と副郭となる郭2を連郭に並べ主尾根筋である南北に郭4と北腰郭群、支尾根である東西に郭3と腰郭群を梯郭に配置している。また水の手(井戸の沢)と目される南谷の中ほどに郭5を配置し谷筋の守りを固める。特徴的なのは指定地外となるが東麓の現在大福寺が所在する平場と前面に展開する空間で、点的な発掘調査ではあるが段切り遺構と排水施設、柱穴、食い違いに普請された構え堀跡が存在することが判明し出土遺物も15世紀末から16世紀後半の遺物が出土していく要害部と同時に存在した根小屋となる可能性が高い城下集落が存在することが推定される状況である(杉山2019、2020、石川2012、2013)。また南西小川町分にはホトケハラ平場群が展開す。付近では武蔵型板碑と緑泥石片岩製の台石が散在して出土しており付近が武蔵型板碑の石材採石遺跡の東坂下地点(高橋・吉田2014)に包括されることから板碑生産と城郭遺構双方との関連が注目される空間である。

この城を象徴するものに石垣、石積み遺構がある。郭3の外周に普請される高さ約3mから5mの石垣を中心に郭1東腰郭に高さ約3mの石垣が所在し、主要な虎口には袖部を中心に石積み遺構が確認され後述するとおり郭1の内部空間にも石積みを多用している。

b 郭1(本郭)について

小倉城跡郭1は標高137m城山の最高所に位置する。内部は2段構成(第7・8図)となり虎口は北、東、南の三方向に開き、いずれも石積みを伴う堅固で視覚効果を高めた造りとなっている。東虎口の北続きにも土塁が切れ虎口状の形状が見られるが、トレンチ調査の結果、石積みを伴わず他の三箇所とは違い時期を異にすることが判明した。山麓に伸びる木落状の掘り割り遺構と方向が一致することから後生開削された可能性が高いと現段階では考えている。土塁は、下段で西側の一部を欠くほかはほぼ全周する。即ち、北虎口から東虎口、東虎口から南虎口、南虎口から西面の一部までは土塁が存在する。西面は土塁のない部分を内郭側に半円状に段切りし平場を形成し上段部へと繋ぐ。この部分は、平成15年度調査

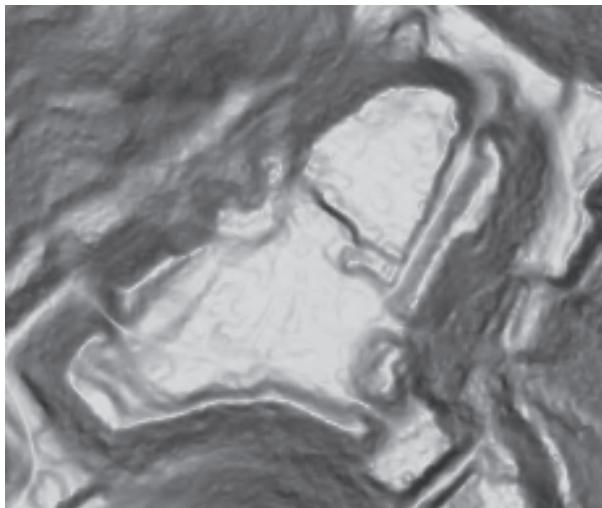


第6図 小倉城跡遺構配置図

によると何度かの改修が認められ、当初面は1.5m程下って排水溝を伴う。最下層からは白磁C群の皿が出土している。この地点では改修が認められることから当初から土塁が存在しなかったのか、或いは存在したが取り払われ現在の形状となったのかは今のところ判断がつかない。埋没しているが北方の柳形虎口西側の郭方面に続く通路が存在する可能性もある。また上段平場にも20～40cmと極めて低い土塁状の高まりが所々途切れながら巡る。上部構造は不明ながら何らかの区画施設の基礎となるのだろうか。下段との往来の為の虎口としては当該平場南辺の東西に確認されている。東の第一虎口は岩盤削出しで形成し西方から東へ50cmほど上がって踊り場を設け直角に折れて上段平場へと至るもので、踊り場部にて角火鉢の底部片が出土した。西端の第2虎口は平入りで遺存は悪かったが3段の礫敷き又は碎石敷の可能性もあるステップと東袖（報文では西袖とし誤認）に小規模な石積みを検出した。染付E群碗と白磁C群皿、瀬戸美濃産大窯2～3期の徳利、カワラケ片など比較的豊富な遺物が出土している。



第7図 郭1(本郭)推定鳥瞰図



第8図 小倉城跡陰陽図(提供 朝日航洋 株式会社)

み遺構が大規模に展開することが予想出来る状況となり、その空間的解釈にも重要な視点が提供されたと言えよう。

d 企画性について

郭1西墨線(大凡NE-45°-SW)と上段南墨線(大凡NW-45°-SE)そして南端の土墨際のラインが西墨線に直行、平行に普請され平成15、16年度調査の当該郭中央で検出された建物跡群の判明する指向方位がやはりこれらと直行、平行関係に復元想定されるところから郭1内部空間の一定程度の企画性が予想できそうである。威信材的遺物は検出されないが、これまでの調査成果から岩盤を含み石に囲まれながら一定の企画性をもって郭1内部空間が創出されていることを特記しておきたい。

4 調査の概要

a 調査の概要

調査地点の詳細は、町発掘調査指導委員会の指導により決定し、郭1(本郭)内の北側平場の中ほど地点を横断する幅4m長さ25m(サブトレンチ延長分含む)で設定した。東より1トレンチから順に4

染付E群碗は被熱痕が伺われ最終段階の片づけ行為の可能性もあるかもしれない。また当該平場東辺の墨線際には本郭北虎口から本郭中心部に至る通路段に添って1m弱の低い石積み遺構を2か所のトレンチで確認しており途中の露出する部分と合わせ約22mにわたり普請されていたと推定される。

c 郭1石積み遺構

郭1(本郭)内郭の南虎口から東虎口へ至る土墨裾部分に1段に3~4石ほどの平石を積み重ねた3段の雛壇状石積みが普請されている。南虎口南端のこの郭の最高所部は中段と頂部に平場を形成し、当該南虎口と東虎口の中間墨線が「く」の字に折れるため、この部分を「w」形に屏風折れ状としてこの部分のみ段を設けず以外は未調査部も含むが3段のステップを石積みにより普請していると想定され、同様の遺構は関東地方では、北条氏邦の鉢形城跡伝秩父曲輪と箕輪城跡で検出例がある。大きくなれば当城が16世紀後半には北条領国となる中でこの城は他国衆たる上田領内に所在するため、こうした遺構の検出は北条氏と上田氏との政治的な関わりの中でも注視する必要がある。これらにより、郭1内においては、石積

トレンチまで区分し、それぞれのトレンチ境界にベルトを残した。掘削は、表土から確認面まで5～10cm程度と極めて浅いためジョレン、移植ゴテ、手鋤などを使用し手掘りで実施している。測量は、国土調査済地域の為、基準点についてはその成果を用い、水準点については、史跡内に所在する三角点及びあらかじめ設置している水準点を用いてトータルステーションにより記録した。完掘時の測量及びドローン撮影については、株式会社中野技術に委託し実施した。調査中の記録写真についてはデジタルカメラにより行うとともに並行してドローン撮影をいずれも担当者が行った。なお補足として一部石川が撮影した写真も掲載したものがある。

b 調査の経過（日誌抄）

令和3年11月11日、調査開始。4m×19mのトレンチ設定。東より1～4トレンチの4区を設定。1トレンチより表土掘削。12日、1トレンチ掘削、精査、プラン確認。極めて浅い位置より近現代と思われる砥石出土。15～17日、2～3トレンチ掘削精査。プラン確認。18日、1トレンチ精査、プラン確認。ドローン撮影。19日、水準点測量。24日、トレンチ北側にサブトレ設定、掘削。この段階の掘削レベルで確認されるSKらしきプランの測量を行う。25、26日サブトレ掘削を行い岩盤の埋没状況を確認。12月2日、2トレンチサブトレで捉えた岩盤面の高さで面的に掘削を進める。3～10日、1、3、4トレンチを2トレンチの高さに合わせ掘削を進め精査。3トレンチにて城段階と思われる鉄釘出土。13、14日、2～4トレンチ精査。2トレンチでは岩盤を洗濯板状に切り立って掘削した面を検出。生活面と思われるが表土か5～10cmと浅く岩盤直上の「床？」として捉えられる面の把握は堆積土が薄く困難を極める。15日、1トレンチ遺物点上げ、No.1～12。16日、遺物点上げ、No.13～16。17日、ドローン撮影、サブトレ掘削。12月21日、4トレンチサブトレ掘削、精査。石敷き遺構検出。当平場を縁どる地ぶくれ状の低い土壘の基礎地業の可能性が考えられる。22日、4トレンチ石敷き遺構精査、1トレンチ掘り下げ。23日、サブトレ精査。石敷き遺構清掃、1トレンチ東端掘り下げ。同所の通路に面した石積み遺構の清掃。24日、遺構清掃、当日にて年内作業終了。令和4年1月5日、年明けの作業開始。1トレンチ精査。6～12日にかけ1トレンチ精査、通路側石積みを残しつつ掘削。東通路側に向かって岩盤が緩やかに下がる。石積み遺構には典型的な裏込めは存在しない。13、14日、1・4トレンチ精査。17日、遺物点上げ、No.17～35。20日、4トレンチに南北方向でサブトレ設置。21日サブトレ内で硬化面確認、小柱穴を検出するも同遺構の掘り込み面は不明。24日、全体精査。中央の岩盤上（3トレンチから4トレンチ東端）に東西方向で2条の溝状遺構が見える。それぞれの幅は30cm前後、溝間の距離は心身で1.6m程度。25日、遺物点上げ、No.36～41。4トレンチ西側は岩盤が西方に潜り込む。階段状に加工したように見える。27日4トレンチの岩盤の潜り込み岩体が結晶片岩のため節理と片理作用による自然地形と判断。東西サブトレ内の方形状プランP1の西脇に円形状プランを確認。掘削深度はP1のほうが深い。28日、梅沢委員来跡。円形状P2は岩盤を掘り込み掘削痕が明瞭に残る。幅8cm程度か。P1・2は切り合いと認識しP1が古か。4トレンチ南北サブトレの土層は分層2層か。2条の溝跡はベルトを設置して掘削確認の要ありの指導。通路側の石積み遺構は岩盤上に土を整地し設置と思われるが地山との違いが不明瞭で分層ができず版築が確認できない。柱穴P1～11の精査。P6・7・9・10・11半截。P6岩盤を掘り込み、P7大小の屑石で埋没、掘方不明、表土下10cm付近で炭化物出土。2月2日、P8、P3半截。P3表土下20cm付近で焼土出土。ドローン撮影。2月3日、柱穴精査。P3柱痕立上り確認。柱径15cm程度か。深度70cm以上。P4柱痕立上り確認。柱径30cm程度、

岩盤掘方検出。P10半截、表土下10cm付近で炭化物検出。9日、P5精査、柱痕立上りを確認。P10岩盤掘方確認、掘削痕あり。P7断面立上り確認。P10の北側対になるピットは調査区外か。10日雪の為作業中止。14日除雪、水除去。P7表土下10cm付近で炭化物。側面の壁は岩盤ではなく屑石で掘り拡げる。プランは円形ではない。22日、P8・9精査。P9下層で岩盤の立上がりを確認。柱穴の中心が想定より南であることが判明。北側を半截することで掘削範囲を修正。P8岩盤の底部を確認。底部は円形と思われ立上りを確認。24日、調査区全体清掃、ドローン撮影。25日。土層断面をトータルステーションにて測量。28日、土層、エレベーション確認。全体遺構測量（株式会社中野技術測量委託による調査支援）。3月4日南北サブトレーンチ土層断面測量。14日、小倉城跡発掘調査指導委員会第2回会議、現地観察。委員4名全員出席。溝跡、配石遺構については性格不明で、柱穴柱間もこの時期に一般的なものと若干そぐわず、事例確認と今後の調査はそれらを念頭に実施する必要があるとの指導あり。また埋め戻しに当たっては掘削した柱穴に土嚢を入れ全体に養生シートを入れ埋め戻すこととの指摘あり。16、17日、2トレーンチでSXとしたピット状遺構の補足調査。22日雪の為中止。23日、埋戻し作業を実施し機材片付けを行って今回の現地調査を終了とした。

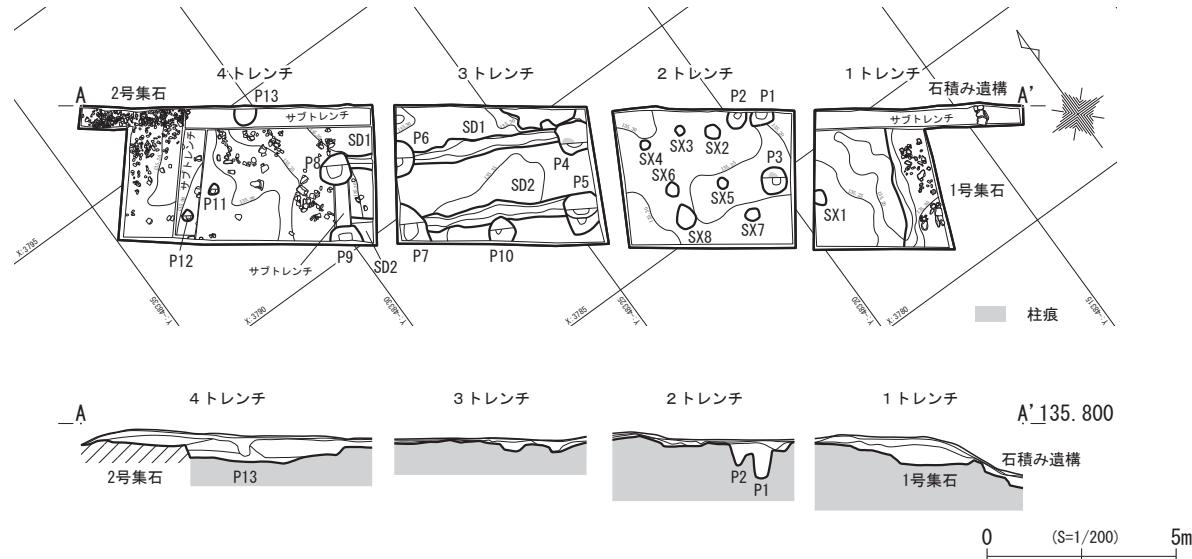


第9図 令和3年度小倉城本郭上段地点トレーンチ設置位置図 (S=1/500 方位図上：北)

III 遺構と遺物

1 遺構

調査地点は、本郭上段地点の中央付近に郭横断方向（第9図）で設定し、東から順次1から4トレンチとしてそれぞれの境にベルトを設置している。検出した遺構には、掘立柱建物跡、柱穴、集石（石敷き遺構）、溝跡、石積み遺構、ピットと思われる未掘で確認のみにとどめSXとした性格不詳の遺構がある。



第10図 小倉城跡本郭上段平場令和3年度調査区全体図 ($S = 1/200$)

a 掘立柱建物跡

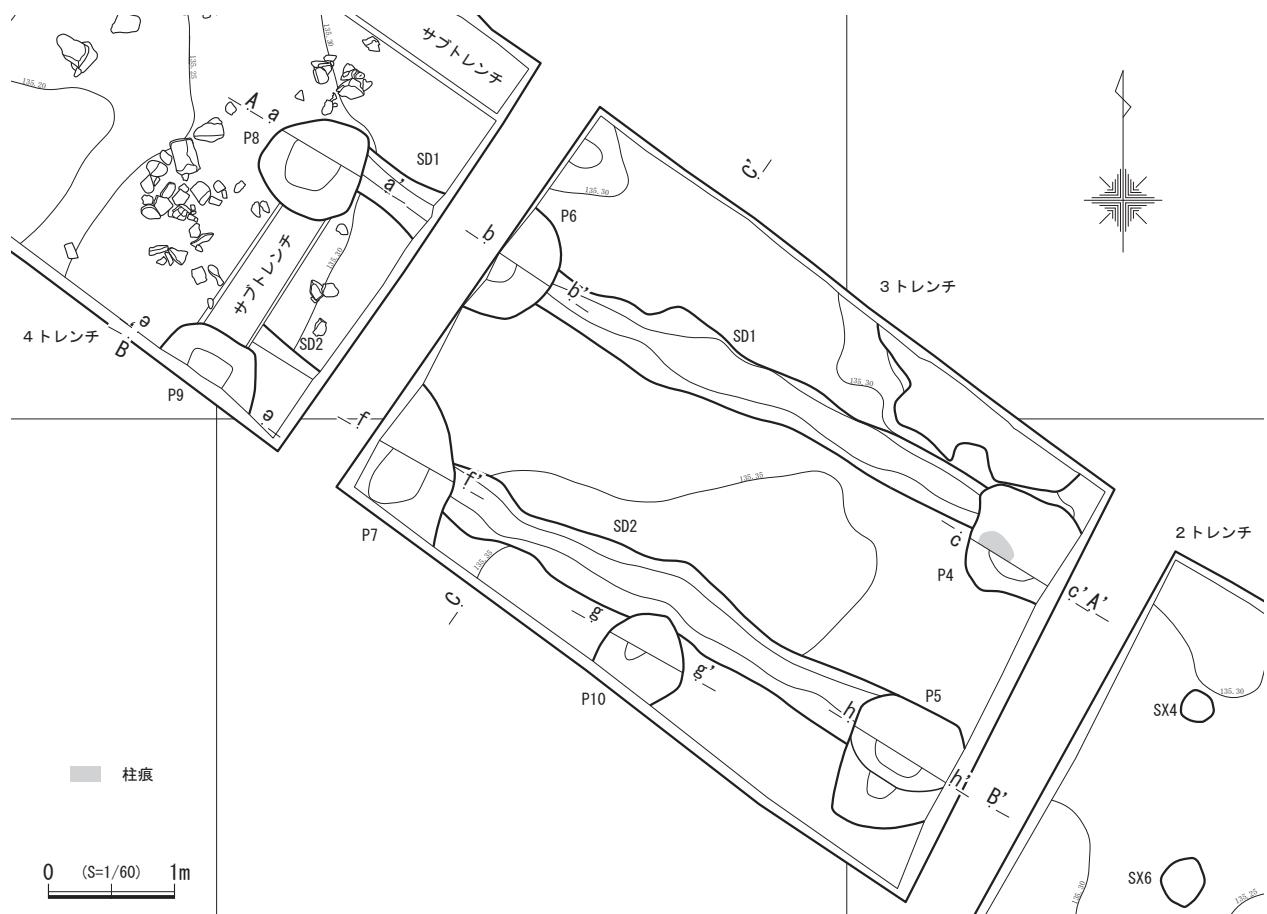
2棟の建物跡を想定している。ただし、建物を構成する柱穴がトレンチ内に収まり切れず柱痕を検出したものもあるが不明瞭である。後述する1・2号掘立柱建物跡が1棟の大型建物となる可能性も排除できない。ここでは、1号と2号を繋ぐ中間の柱穴を検出できなかったことからひとまず2棟の建物跡とし報告するものである。なお、P3地表下20cm付近から焼土、P7・10から炭化物が出土している。

1号掘立柱建物跡 (第11～13・16図)

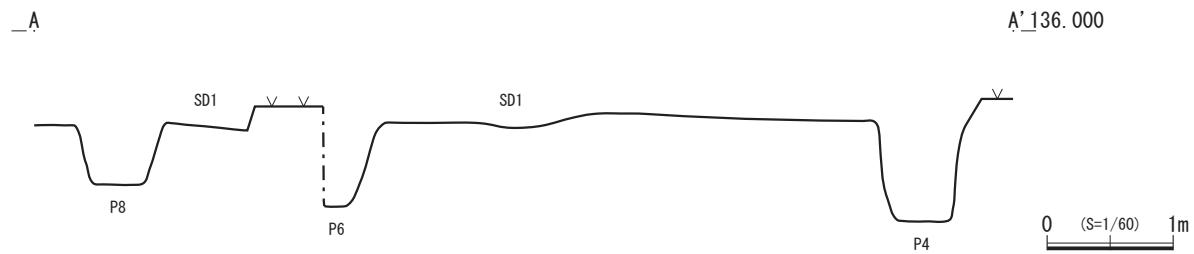
3～4トレンチ内に検出されたP4～7・10とP8・9によって構成され以前の調査で北へ延びることは確実で、南へ延びる可能性も或いはあるかもしれない。現状では梁行き2間、桁行2間以上で西に庇が取りつく構造と推測した。いずれも芯々が不明瞭ながら、梁間はP7—P10が約235cm、P10—P5が約220cm、桁間がP7—P6で約190cm、P5—P4で約190cm、庇の桁方向はP9—P8は約190cm、梁方向はP7—P9、P8—P8とも約160cm前後である。それぞれ岩盤を掘削した掘方に柱を据え碎石を互層気味に版築し柱を固定しており、プラン確認時及び半截掘削部にて焼土や炭化物が出土した柱穴があった。推定梁方向の方位はN-58°-Wである。各柱穴の確認できた規模などは遺構観察表(表1)を参照。

2号掘立柱建物跡 (第15・16図)

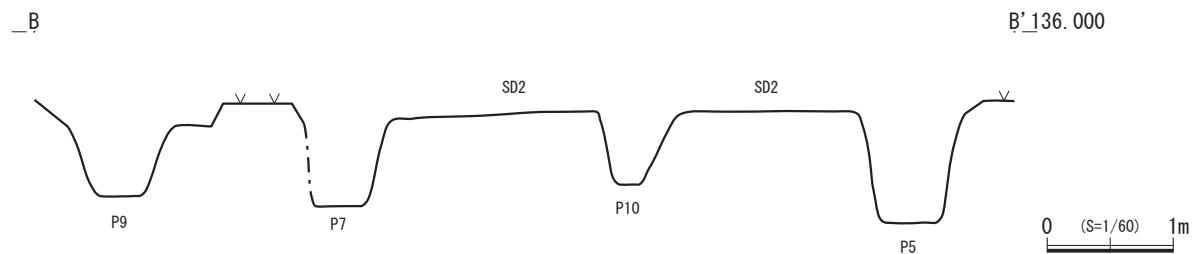
2トレンチ内に所在し、P1、P2、P3から構成される。調査時の所見ではP1・2に切り合いが



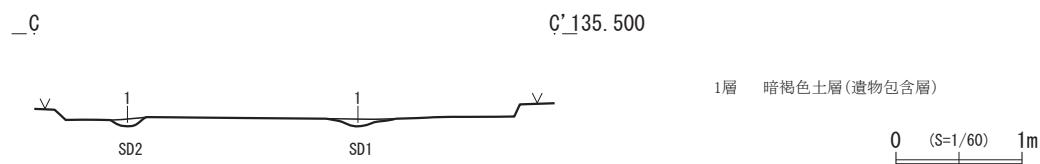
第11図 1号掘立柱建物跡、溝跡平面図 ($S = 1/60$)



第12図 1号掘立柱建物跡 P8-P4 断面図 ($S = 1/60$)

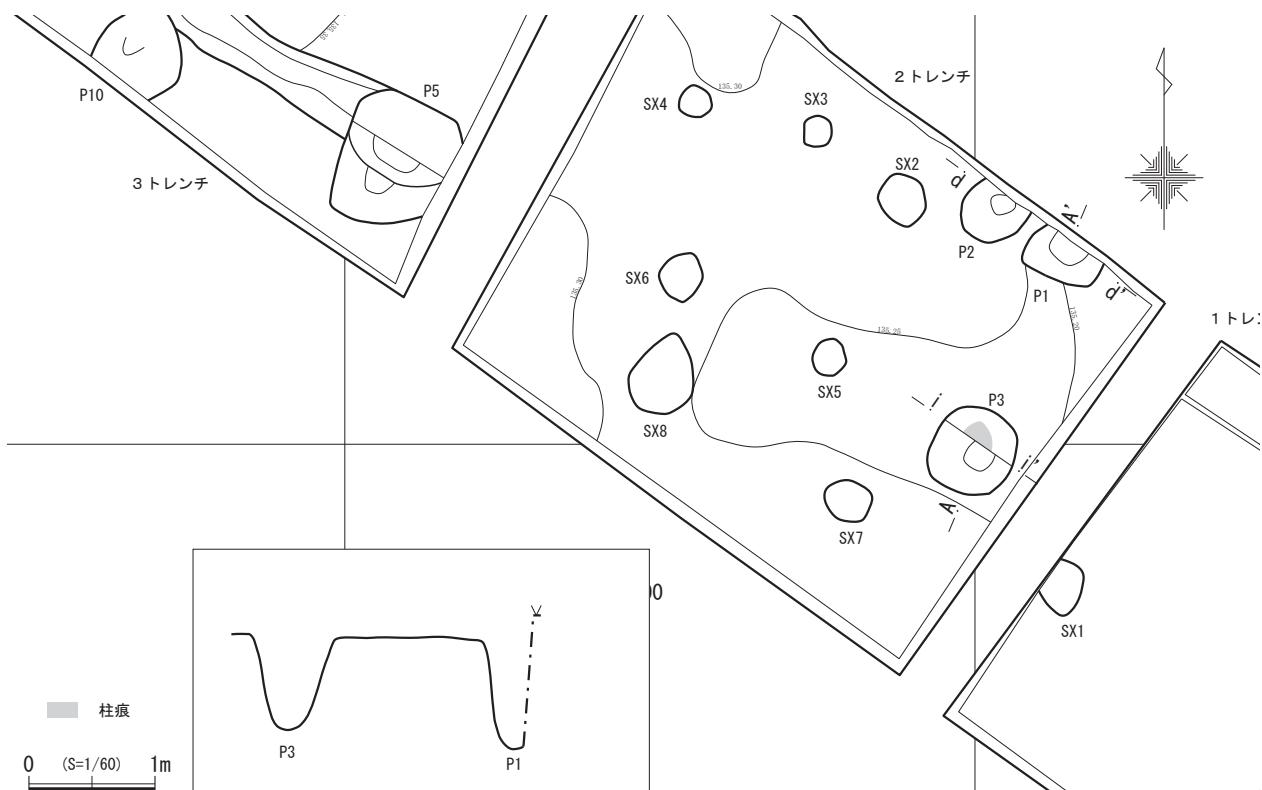


第13図 1号掘立柱建物跡 P9-P5、P10-P5 断面図 ($S = 1/60$)

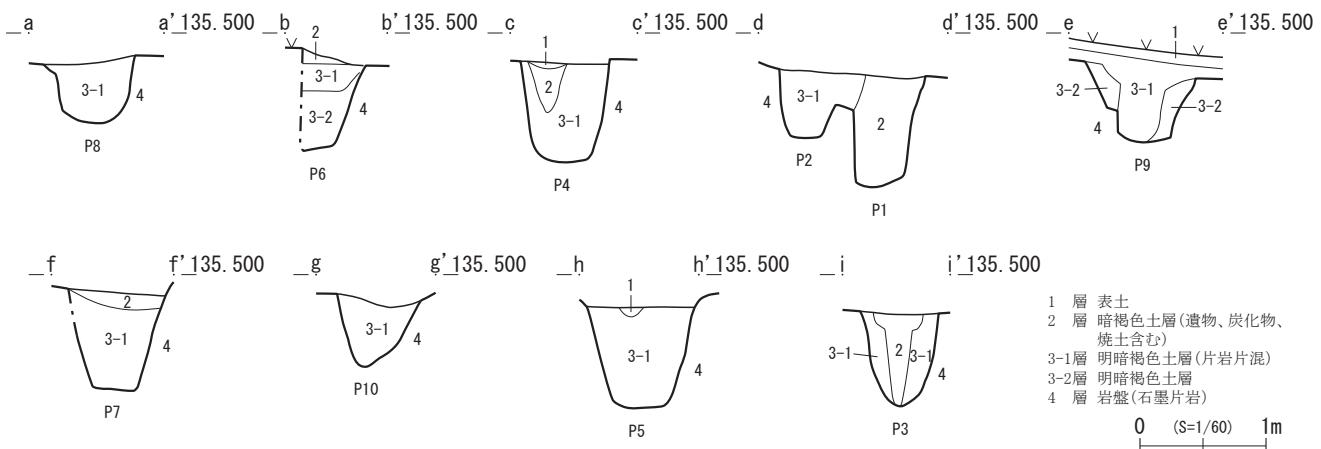


第14図 溝跡断面図 ($S = 1/60$)

あり P2 が P1 を切り P1 が古く P2 を新と解釈したが(今回提示したセクション図は新旧表現のまま)、検討の結果新旧とする解釈に疑義が生じたためひとまず検出したままに報告する。平面形は現況で L 字状の鍵型となり P1 と P3 を結んだラインは南北調査区外へのびる可能性もある。芯々を捉えきれていないが、P1—P3 の柱間は約 190 cm、P1—P2 の柱間が 75 cm 程となる。現状では建物跡とするより柵や塀に近い構造物とすべきであるが、例えば SX5・6 など半截掘削せず確認のみにとどめたピット状遺構は P1—P3 ラインと直行する位置関係で建物となる可能性も捨てきれず、更に 1 号掘立柱建物と連結する(未確認部分もあり現状では若干の軸ずれあり)大型建物となる事も視野に入れておく必要はある。P1—P3 ラインの軸方位は N—30°—E である。構成柱穴の確認できた規模などは遺構観察表(表 1)を参照。



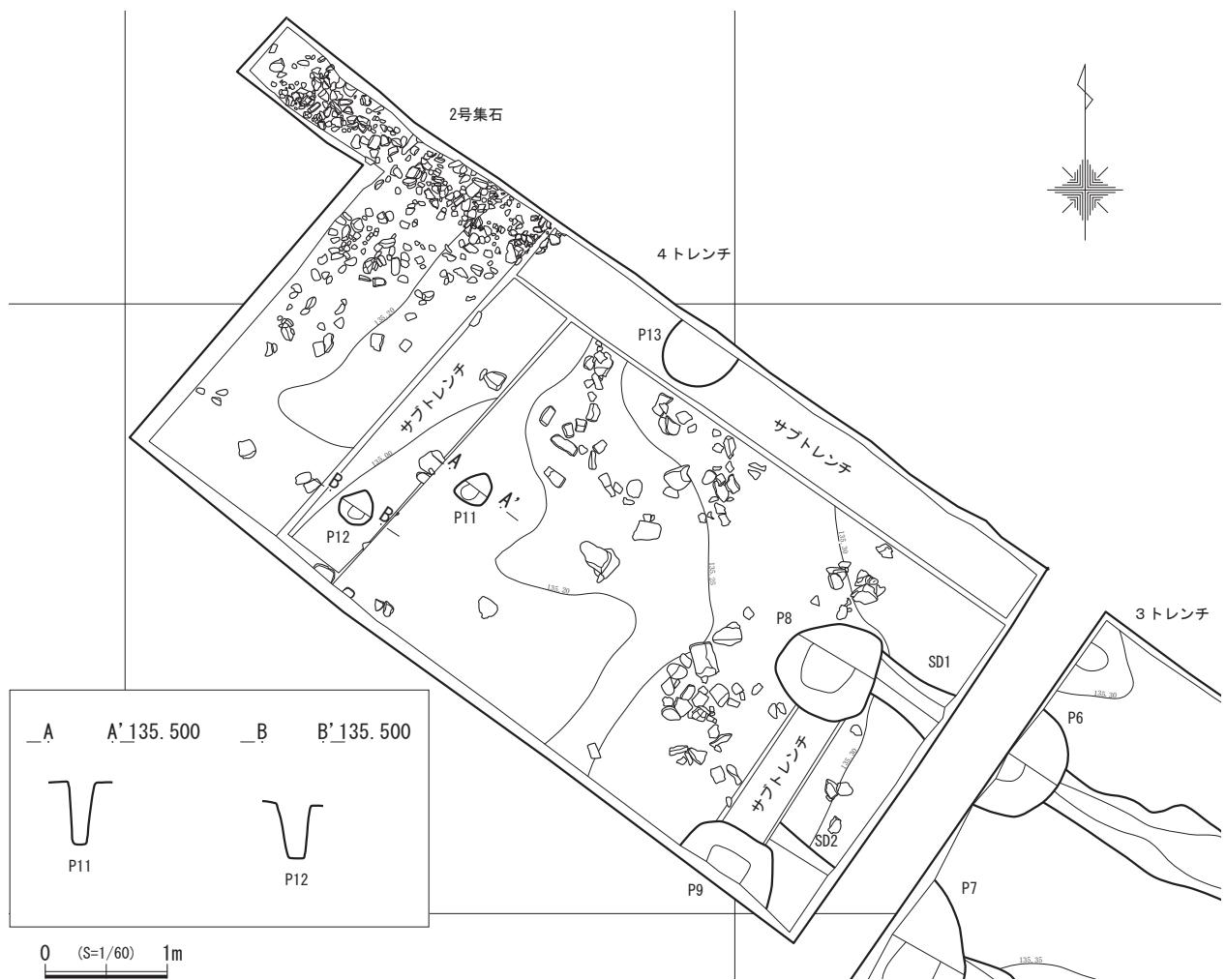
第 15 図 2 号掘立柱建物跡平面、断面図 ($S = 1/60$)



第 16 図 1・2 号掘立柱建物跡、柱穴土層断面図 (P1 ~ 10) ($S = 1/60$)

b 柱穴 (第17図)

構造物としての構成が、不明確な柱穴について、ここで触れる。4トレンチ内で確認されたP11・12・13(4トレンチサブトレ内に所在。1次遺構確認時[写真図版2・7]及び土層断面[第17図]にて追認)がこれに当たる。位置関係としては、いずれも4トレンチの西側3/4程度が岩盤の潜り込む造成土でその中を掘削して構築したものである。P11とP13については、既に11月18日のドローン撮影写真に写っていることと1次精査確認プランを記録した同24日の測量データの位置及び完掘時の遺構測量で記録された遺構位置が一致することが判明している。このことから同じく11月18日段階の精査で姿が見え始めていた1号掘立柱建物跡と同一面から掘削が始まっている同時期の柱穴の可能性が指摘できようである。一方P12については年明け1月からはじめた3次段階精査で確認された。日誌には硬化面の記述もあり、古段階のものの可能性もある。この周辺は造成土による部分で造成途中の何らかの遺構の可能性もありその新古の時間幅の推定材料は今のところ存在せず不詳である。遺構の規模等は表1参照。



第17図 4トレンチ柱穴(P11・12平面、断面図)、2号集石(S=1/60)

表1 柱穴、性格不詳遺構観察表

名 称	形 状	規 模	深 度	備 考
P1	(隅丸方形)	0.62×(0.38)	0.89	北側調査区外プラン未確認
P2	(円形)	(0.52)×0.50	0.54	北側調査区外プラン未確認
P3	(隅丸方形)	0.68×0.64	0.73	柱痕／約20cm下から焼土が多く出土、柱穴部が埋土かは記録なし
P4	(隅丸方形)	0.82×0.82	0.78	柱痕／東側ベルト未掘プラン不詳
P5	(不整方形)	1.08×(0.90)	0.80	柱痕／東側ベルト未掘プラン不詳
P6	(円形)	0.98×(0.49)	0.79	西側ベルト未掘プラン不詳
P7	不詳	(0.98)×(0.78)	0.77	西側はベルト未掘、南は調査区外プラン不詳／約20cm下から炭化物
P8	(不整隅丸三角)	0.82×0.80	0.48	
P9	(隅丸方形)	0.88×(0.39)	0.63	柱痕／南側調査区外プラン不詳
P10	(円形)	(0.64)×0.69	0.53	南側調査区外プラン不詳／約20cm下から炭化物
P11	(隅丸三角)	0.29×0.23	0.50	造成土中を掘削
P12	(不整円形)	0.29×0.29	0.45	造成土中を掘削
P13	(円形)	(0.58)×0.58	0.48	東西サブトレ内／1次精査写真、土層断面
SX1	(隅丸三角)	0.50×(0.29)	—	プラン確認のみ未掘
SX2	(不整円形)	0.39×0.38	—	プラン確認のみ未掘
SX3	(不整円形)	0.25×0.25	—	プラン確認のみ未掘
SX4	(不整円形)	0.25×0.23	—	プラン確認のみ未掘
SX5	(不整円形)	0.29×0.27	—	プラン確認のみ未掘
SX6	(不整円形)	0.39×0.34	—	プラン確認のみ未掘
SX7	(不整円形)	0.39×0.30	—	プラン確認のみ未掘
SX8	(不整楕円形)	0.65×0.50	—	プラン確認のみ未掘

※規模、深度の単位はm 規模()を付したもののはベルト及び調査区外へ延びるもので確認できた数値である

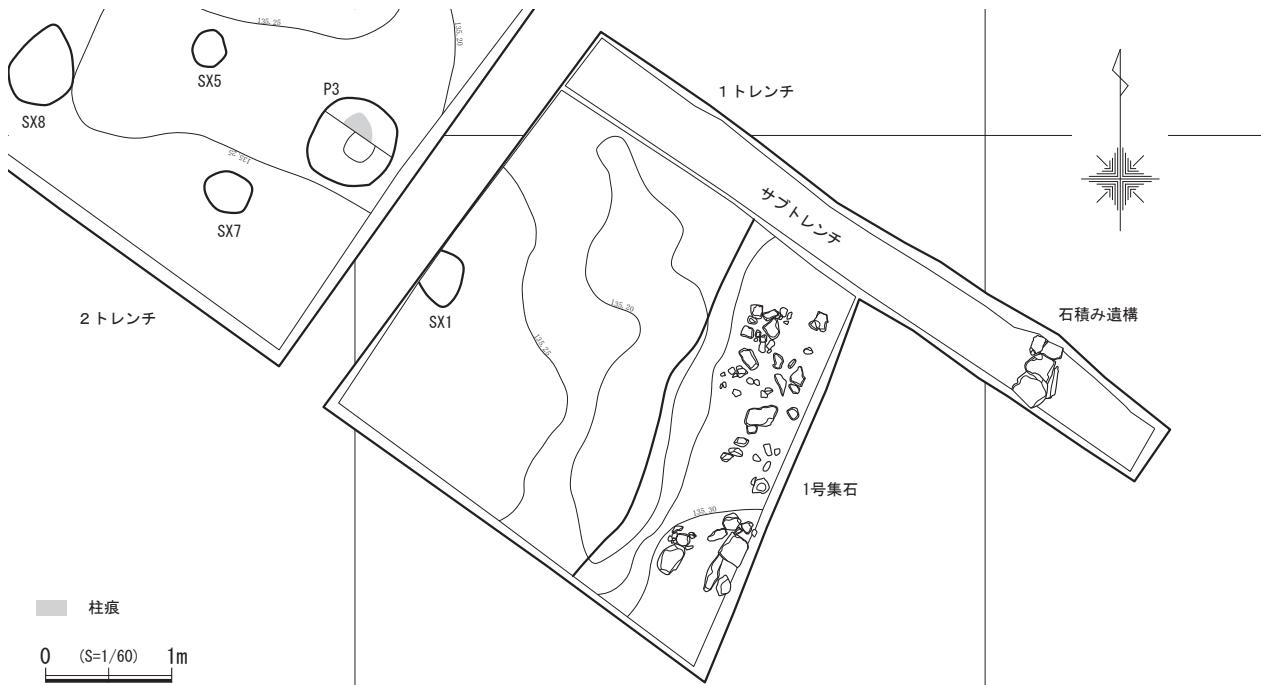
c 集石

1号集石(第18図)

1トレンチ東端に所在し上段平場の東辺の縁に添って確認された。同所に伸長して見られる地ぶくれ状の低土壘と密接に関わる遺構と推定され、その基礎地業の可能性がある。片岩屑石をランダムに敷き詰めたもので後述2号集石に対し、遺存状況は良好ではないようだ。被熱しているのか焼土塊や炭化物などが散見され赤褐色を呈するカワラケ底部などが出土している。屑石に混じって原位置を留めていない可能性が高いが30cm程度の片岩平石が水平に何点か検出されており小型の礎石として使用された可能性も考慮する必要があるかもしれない。サブトレンチによって確認した土層の堆積では明確な版築面は確認できなかったが石墨片岩の岩盤を斜めに削り造成土を盛った上に構築されている。

2号集石(第17図)

4トレンチ西端に所在し、南側は緩やかに弧を描いて収束し北側は調査区外へ伸長すると考えられる。当遺構は1号集石と同様に上段平場を縁どる地ぶくれ状の低土壘の西対辺に当たり、低土壘と密接にかかる遺構で基礎地業に当たるものと推定される。1号集石より良好な遺存状況でほぼ粒が揃う片岩屑石が北東に盛り上がり気味に密に検出された。南西側で収まり途切れるのは、この南北方向の更に先に平成17年度調査で確認した上段と下段を行き来する平入りの虎口遺構が存在することと関係するのだろう。裾の伸長方位は直線に伸びる面が調査区になく不詳である。



第18図 1号集石、石積み遺構(平成17年度調査済遺構) ($S = 1/60$)

d 溝跡 (SD)

1・2号溝跡 (第11・14図)

3トレンチ及び4トレンチの東端に所在する。北側を1号溝跡、南側を2号溝跡とした。1号溝跡はP4—P6—P8を結ぶように検出されP4、P8の両側へは伸びない。また2号溝跡はP5からP10を僅かにかすめP7に至る。ベルトを挟みP9に続く掘り込みは判然としなかった。双方とも位置関係から1号掘立柱建物跡と密接に係る遺構と推察されるがその性格は不詳である。柱穴との切り合いは不明だが、当初精査段階で部分的に確認できていた1号掘立柱建物跡の柱穴群に対し溝跡は日誌によれば1月24日にその存在が認識されており、1号掘立柱建物跡の作事当初に掘削された可能性もある。建物の内部仕切りか、建設時のガイド的に掘削されたものであろうか。双方とも溝の幅は30～50cm前後深さは5～10cmと極めて浅い。走行方位は、N-58°-Wで1号掘立柱建物跡の推定軸方向に直行する。

e 性格不詳遺構 (SX) (第15図)

2トレンチから1トレンチ西端にかけて確認した。これらは、時間的な制約もあり半截掘削せず確認のみにとどめており、プランの形状を測量記録した。掘削していないため性格不詳遺構としたが柱穴である可能性が高い。それぞれの平面規模と形状については表1を参照。

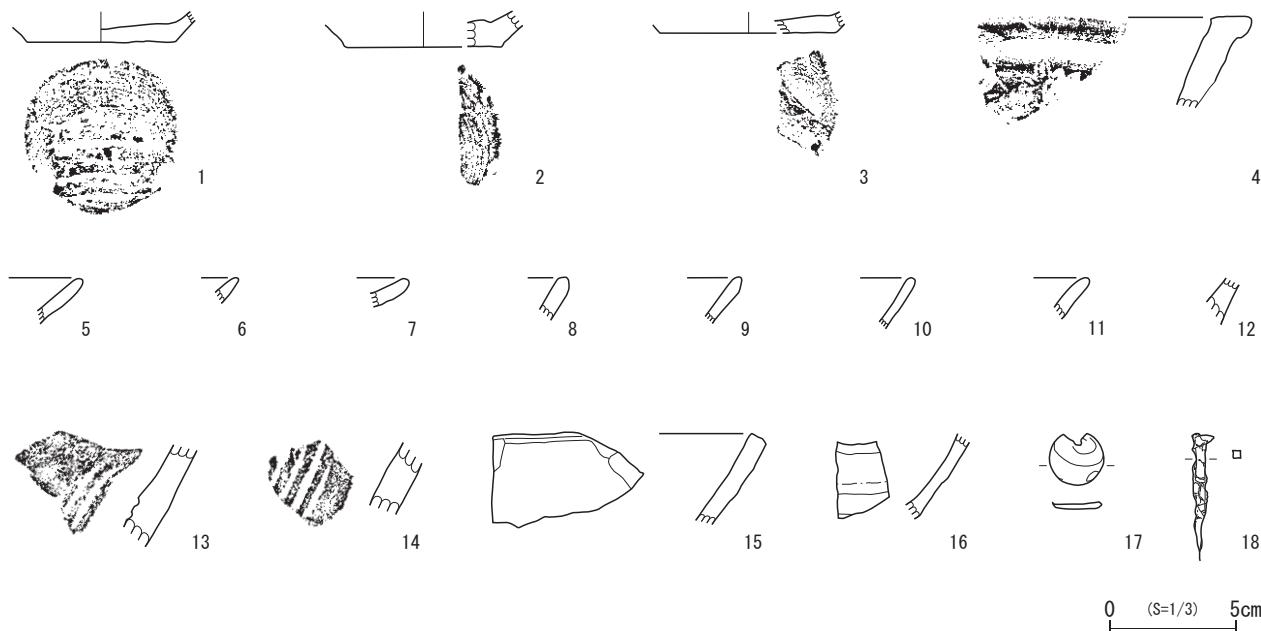
f 石積み遺構 (第18図)

平成17年度調査で確認した遺構で基礎情報は同報文を参照(石川2007)。瀬戸美濃産大窯1期の擂鉢口縁部(第20図14)が出土している。

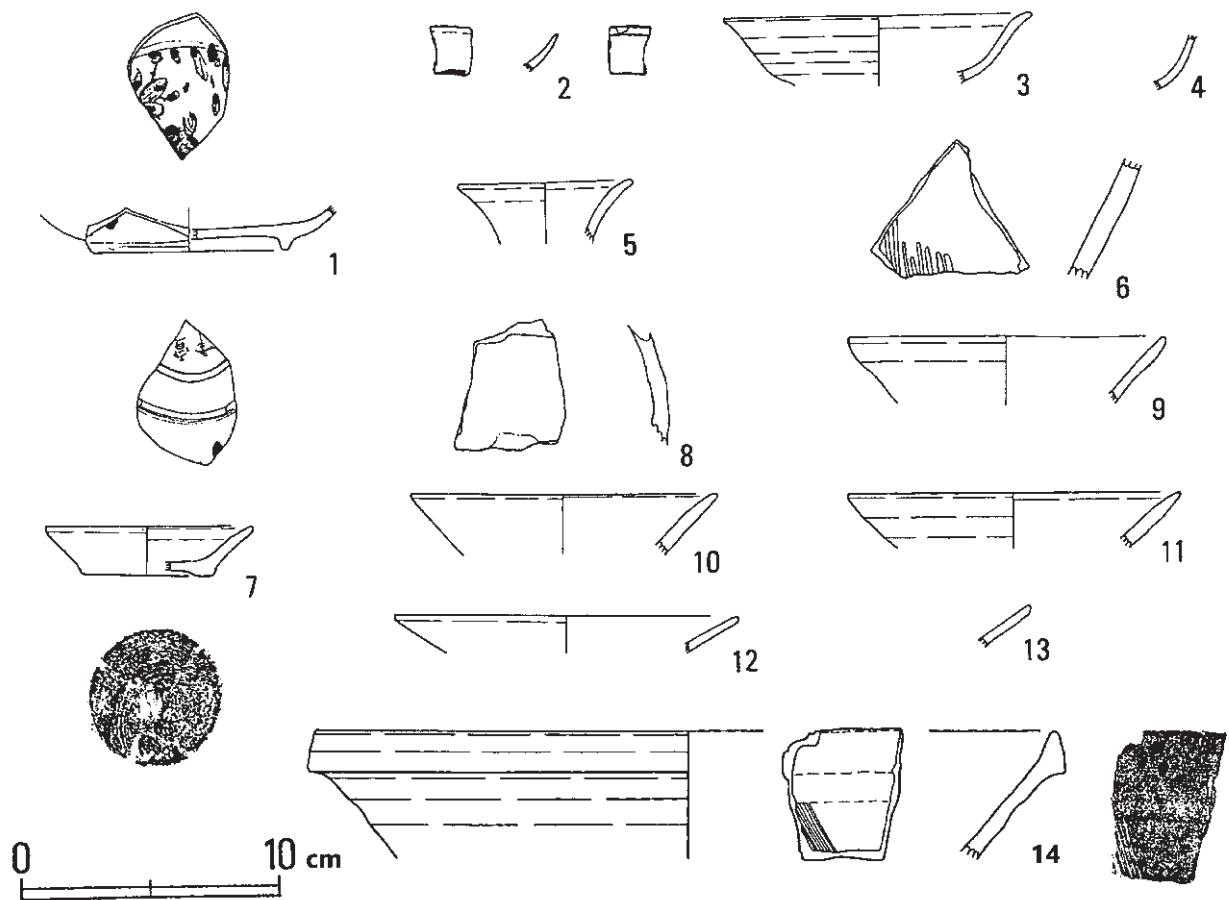
2 遺物

出土遺物は、点上げした遺物の内18点を図示した。出土層位は表土下5～10cmの1層（表土）、2層（暗褐色土：遺物包含層）からの出土で極めて深度は浅い。掘削は手掘りとしたが出土層位の判別は実質困難であった。遺物の内訳は、かわらけ、在地産鉢、在地産火鉢、瀬戸美濃産天目茶碗、鉄釘、碁石（盤双六駒）、焼けた土壁でいずれも小片、細片での出土であった。今回図示していないが、薄手の鍋、手づくねかわらけとなる可能性のある破片も出土している。

1～3、5～12はかわらけである。1～3は底部片で1、3は焼き上がりがりの色調が橙色（5YR6/6）系の強い発色で小倉城跡では初出の赤かわらけである。胎土には雲母、黒色粒、砂粒を含む。双方ともロクロが左回転で1には底部に板状圧痕が見られる。5～11は口縁部付近の破片で口唇部にバリエーションが見られるため細片ながら敢えて掲示した。5は出土位置から1と同一個体の可能性がある。6は口唇を尖り気味とする。7は器高が低く小皿と思われる。体下部から底部を欠き不詳ながら手づくねかわらけとなる可能性もある。8、9は外面口縁下に段状の稜をもつ。10は薄手で直線的な立上り11は口縁が外反する。12は体下端の資料で器壁が厚手となる。4は在地系（浅黄橙10YR8/3）の丸火鉢の口縁部である。外面口縁部下に押印が見られるが欠損により判然としない。指を広げたような弁（葉）のモチーフとなるか。弁央に凸細線の稜線を表出す。胎土に長石、角閃石、砂粒を含む。13～15は在地系の鉢。13、14は内面に下から上に引かれた粗いすり目が見らるる。同一個体資料か。色調は内外面灰褐（5YR6/2～7.5YR5/2）、胎土は角閃石、砂粒、石英、長石を含む。16は硬質の焼き上がりで、薄手の片口鉢。粗い胎土の橙色系（赤橙10R6/6）赤焼きの資料で産地不詳の在地系とした。胎土は砂粒、長石、角閃石を含む。16は瀬戸美濃産の天目茶碗。外面中位以下を露胎し器壁が3～4mm程の薄手で直線的ながら遺存上部で僅かに丸みをもって立上がる。年代指標の口縁部や高台部は存在しない。上段地点では江戸期の遺物は今まで知られず大窯1～2期頃のもののようにも思えるが、こうした特徴は古瀬戸後期様式から江戸期にも存在することから、ここでは絞り込まず幅広く捉えて15世紀後半～17世紀頃の資料としておきたい。17は碁石で盤双六の駒、18は断面四角を呈する鉄釘である。



第19図 本郭上段地点出土遺物 (S=1/3)



第20図 参考資料 平成17年度調査上段地点第2虎口、通路部出土遺物 (S = 1/3) (石川2007より転載)

IV 小結

令和3年度小倉城跡郭1上段地点の調査について。その成果を箇条書としまとめに替えたい。

- ① トレンチ調査区外へ延びるが大型の掘方をもつ掘立柱建物跡の確認が追認された。状況としては(石墨)片岩質の岩盤を掘り抜き破碎した片岩の屑石を版築埋め土として柱を据える工法は郭1下段と同様なものであった。棟数は1乃至2棟と推定され建物の軸方向も郭1の造成軸に沿った企画の中で作事されたものである。柱間は調査区外へ建物が延びる点と完掘せず未確定な部分を含むが推定梁方向が約2.2～2.3m、桁方向が1.9m前後で下段地点と同様推定梁間が広い。
- ② 今次調査上段郭の年代は、まず出土遺物の構成が貧弱かつ小片、細片の類で判然としない点、表土から遺構面までの深度が極めて浅い点に起因する層位把握の困難さなどの課題から今回の出土遺物で絞り込むことは厳しい状況である。ただし、瀬戸美濃産天目茶碗は除外するとして、かわらけや在地産鉢は概ね16世紀代に帰属すると推定され過去の調査で出土している大窯1期の瀬戸美濃産擂鉢(通路トレンチ 第20図14)、大窯2～3期の徳利、染付C群、E群(上段第2虎口 第20図1～13)などの出土遺物とも齟齬はなく城以前の中世前期に遡る遺物は措くとして、城段階として今回も積極的に15世紀後半に遡る遺物は無かったとひとまず推定しておく。
- ③ 上段地点も下段と同様に斜位に層状堆積する片岩体を掘削し水平な平場を作り出している。郭端

の東西では斜めに岩体を掘削し、そこに造成土を盛り墨線を整える状況が伺えた。改めて見ると、このような状況は本郭の他地点でも確認され、自然地形ではなく人工的掘削により地形制約を受けながら直線的に墨線普請した結果と推定されそうである。この点は陰陽図（巻末図参照）からも伺る。結晶片岩の岩山に築かれたこの城では、通徹した工法と指摘できるのかもしれない。稿を改めたい。

- ④ 東西の造成土中では精査が甘く未把握の柱穴が存在した可能性があり課題を残した調査となつた。

写真図版 1



本郭上段調査前現況 西から東



本郭上段調査前現況 南から北



本郭上段調査前現況 東から西



トレンチ設置地点



本郭上段調査前現況 北から南



トレンチ設置状況 南から北西

写真図版 2



1次精査 1 レンチ



1次精査 4 レンチ



1次精査 2 レンチ



1次精査 1 レンチ近景



1次精査 3 レンチ



1次精査 3 レンチ近景

写真図版 3



1 レンチ かわらけ出土状況



4 レンチ 天目茶碗出土状況



1 レンチ 丸火鉢出土状況



1 レンチ サブトレ出土遺物 1



1 レンチ 在地系擂鉢ほか出土状況



1 レンチ 墓石(盤双六駒)出土状況

写真図版 4



1号集石 1次精査確認（ドローン写真）



2号集石（オルソ写真）



1号集石 南西より



2号集石（上段郭西端低土壘基礎地業）



1号集石（オルソ写真）



2号集石サブトレンチ内エレベーション

写真図版 5



1・2号掘立柱建物跡、1・2号溝



1号掘立柱建物跡、1・2号溝



2号掘立柱建物跡

写真図版 6



1P、2P(2号掘立柱建物跡)



4P(柱痕あり)



1P、2Pセクション



5P(柱痕あり)



3P(柱痕確認)



6P(石墨片岩面掘削)

写真図版 7



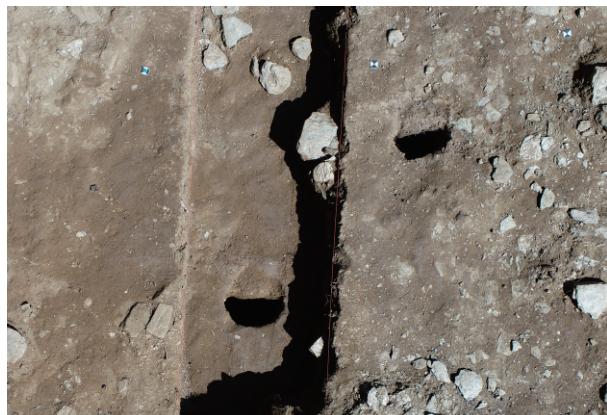
7 P (石墨片岩面掘削)



10 P



8 P



11 P、12 P



9 P (断面柱痕あり)



13 P (中央トレンチ壁際 確認時)

写真図版 8



1P、2P、3P、SX2~8



4P、5P、6P、10P、SX1



4P、5P、6P、7P、10P、SX1



サブトレ内石墨片岩盤



6P、7P、8P、9P



SX2~8 (黒○印—確認のみ未掘)



S X 9 (黒印一確認のみ未掘)



1・2号溝

上段郭西端岩盤掘削(中央)造成土(右)
(4T s b T 西北より)

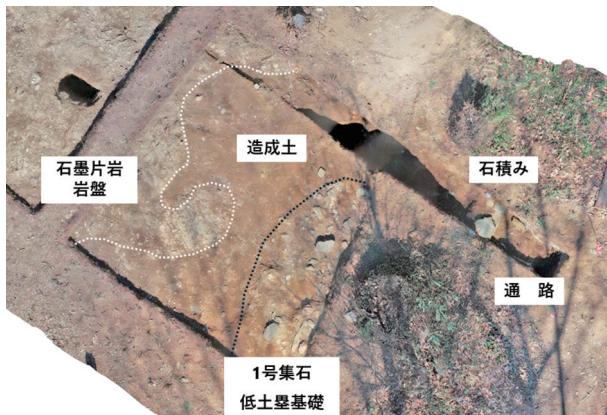


上段郭西端岩盤掘削とその上の造成土
(4T s b T 南西より)



上段郭西端造成土と2号集石
(土墨基礎地業と低土墨土層断面)

写真図版 10



上段郭東石墨片岩岩盤、造成土、1号集石



2P 岩盤掘削痕



上段郭東端岩盤掘削と造成土土層断面



9P 掘方岩盤掘削工具痕（扁平な蒲鉾状）



上段郭東岩盤掘削状況と造成土、1号集石



上段郭東端石積み遺構



調査区全景（オルソ写真）

写真図版 12



作業風景 1



養生シート被覆



作業風景 2



埋戻し 1



作業風景 3



埋戻し 2

写真図版 13



令和3年度 小倉城跡郭1(本郭) 上段地点出土遺物 表



令和3年度 小倉城跡郭1(本郭) 上段地点出土遺物 裏

史跡比企城館跡群小倉城跡航空レーザー測量速報

史跡 小倉城跡 陰陽図（協力 朝日航洋 株式会社）



I 調査の経緯

本事業は、令和5年度国庫補助事業の採択を受け国庫補助金、県費補助金、町支出金をもって実施した。目的は、国指定史跡小倉城跡には土砂災害警戒区域が3箇所該当し、近年の自然災害の激甚化によ

り土砂崩れ等でき損する可能性が高まっている中で、本質的価値である遺構地形を被害がほぼ無い今の状態で3次元的に記録保存し、かつ既存の平面図（平成9作成）では得られていない史跡全体の世界測地系座標を超高精度で取得し、さらに既存図面では捉え切れていない地上に表出している遺構を網羅する為に航空レーザー測量を実施するとした。

II 調査と主な成果の概要

史跡小倉城跡を中心に1km四方の範囲を対象とした。史跡地目の約99パーセントが山林で針葉樹、照葉樹とともに一定の落葉樹が混在することから、落葉の完了をまって令和5年12月18日に作業を行った。主な成果は、従来から知られていた遺構部分では極めて精細なデータが取得された。また未知の遺構として東正面側に綴れ折れの登城道と推定される陰影が明瞭に認められた点、城西面では槐川から直接城へ繋がるルートの存在を伺わせる両側からカニ爪状に斜めに降る土壘構造の陰影が二重に認められた点は注目される。そして従来から公図区画より予想された下里坂下方面からのアクセスもはっきりと綴れ折れに登城道が見て取れ追認された。その他多岐にわたり細かな点で多くの気づきがあるが、仔細は、現地踏査を踏まえた本報告に譲ることとして、成果図を速報しデータ公開の責を果たすものである。なお、公開範囲には指定地外の民地と指定地内ではあるが小川町嵐山町分を中心に未買収地も含まれるため、踏査を行う場合には節度とルールある行動を切に望みたい。遺構破壊につながる無謀な踏査行為は史跡管理団体として厳に謹んでいただきたい事を申し添える。

報告書抄録

フリガナ	チョウナイイセキ							
書名	町内遺跡							
副書名	史跡比企城館跡群小倉城跡							
巻次	I							
シリーズ	ときがわ町埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	第16集							
編著者	石川安司							
編集機関	ときがわ町教育委員会							
所在地	〒355-0395 埼玉県比企郡ときがわ町大字桃木32番地							
発行日	2025年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おぐらじょうあと 小倉城跡	さいたま县ひきぐん 埼玉県比企郡 ときがわ町 おおあざたぐろ 大字田黒 あざしろやま 字城山1184	11349	22	36度 3分 29秒	139度 29分 71秒	20211018～ 20220331	80.5 m ²	保存目的の範囲内容確認調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小倉城跡	城館跡	戦国	建物跡・集石・溝跡		かわらけ・在地火鉢・擂鉢 天目茶碗・鉄釘・盤双六駒		大型の掘方を持つ掘立柱建物跡の存在を確認。 墨線形成に岩盤を斜位に掘削しその部分に造成土を盛って直線的なエッジを整えていることが判明した。	

ときがわ町埋蔵文化財発掘調査報告第16集
町内遺跡XV

史跡比企城館跡群 小倉城跡 I

—令和3(2021)年度郭1(本郭)上段地点調査報告—
—令和5(2023)年度航空レーザー測量速報—

2025年3月31日

編集・発行 ときがわ町教育委員会
印 行 たつみ印刷株式会社